

日本語を快適に処理 国産機PC-9801のヒット

1983年、それまでホビー中心に使われていたパソコンは大学へ、仕事場へと少しずつ入り始めていた。日経パソコンが創刊されたこの年、国産パソコンの歴史の中で最大のヒットとなる製品が、徐々に売り上げを伸ばしつつあった。PC-9800シリーズだ。

1982年から1983年にかけて、パソコンに一つの変革が起こった。「8ビットパソコンから16ビットパソコンへの進化」である。16ビットCPU——それは、クロック1回で処理できる情報量が16ビットという演算チップだ。16ビットパソコンは単に高性能というだけでなく、日本のパソコンユーザーにとって非常に大きな意味があった。かねてから懸案であった漢字の扱いが、それまでの8ビットパソコンに比べてぐっと高速になったのだ。

英語ならアルファベット26文字の大文字/小文字に数字や記号を加えても8ビット=256個以下しか記号が存在しない。しかし、平仮名、片仮名に加えて漢字を使う日本語の場合は8ビットでは取まらない。JIS規格の定める基本漢字だけでも6879字もある。16ビット=6万5536個ならば、文字の種類が多い日本語を十分扱うことができる。16ビットパソコンの登場は、日本語の高速処理が可能になり、文書作りなどの仕事にパソコンが使えるようになることを意味していた。

メーカー各社が16ビット機を発売する中で、日本電気も1982年10月に「PC-9801」を発売する。初代PC-9801はライバルと比べて、GDCという自社独自のグラフィックチップを搭載するなど、ディスプレイの表示を高速化するためのさ

まざまな工夫が凝らされていた。この時期、まだグラフィックス高速化の重要性はほとんど誰も認識していなかったが、PC-9801は「動作が速い」という評価とともに、1983年ごろからユーザーの間で注目を集め始めた。

豊かな表示能力にも強み

その後、PC-9800シリーズの人気はさらに高まる。優位を決定づけたのは、1985年7月に発売された「PC-9801VM」だ。高性能なインテル互換の「V30」CPUを使用し、漢字フォントはROMに標準搭載。アナログRGBディスプレイの解像度は640×400ドット、4096色中の任意の16色を使えるなど、当時としては豊かな表示を実現した。フロッピーディスク装置を2台搭載しデータのセーブも容易になった。

画面が美しく、拡張性が高く、日本語処理も速くて使いやすい——98VMの登場で、「オフィスのパソコン」の覇者は定まったといってもよい。次々と発売された「松（ワープロ）」「桐（データベース）」（管理工学研究所）、「一太郎（ワープロ）」（ジャストシステム）などの日本語処理が

可能なアプリとともにPC-9800シリーズは売れ続け、一時はパソコン市場でシェア90%超を押さえるまでに至った。

1987年になって、エプソンがPC-9800シリーズのソフトが動く互換機で市場に参入してくる。このときの広告で使われたキャッチコピーが「国民機」だった。それはまさにPC-9800シリーズが日本という国の標準システムとなっていることを図らずも示していた。このような「98天下」はWindows 95が登場し、IBM PCアーキテクチャーが標準になるまで、約15年続いた。

PC-9800シリーズでは美しく高速のグラフィックス機能を生かしたさまざまなゲームソフトが発売され、一大市場を築いたことも特記しておく必要があるだろう。「信長の野望」（コーエー）、「大戦略」（システムソフト）、「A列車で行こう」（アートディンク）、そして「同級生」（エルフ）に代表される18禁ゲームなどなど。1990年代に入ると、日本のゲームしたさに米国のマニアが秋葉原にやってきてはPC-9801を買って帰るといった現象すら起きた。ビジネスとホビー、PC-9800シリーズは両方の市場で覇権を握ったのだった。

初代PC-9801。1982年10月発売。本体価格29万8000円で、フロッピーディスクドライブ、ディスプレイ、プリンターは別売。日本語を表示するためには、さらに日本語文字データを搭載した漢字ROMを購入する必要があった

